



登山 月報

JMSCA 登山月報 第675号 令和7年6月15日発行



「大和葛城山から金剛山方面を望む」



No.675

| | |
|--|----|
| 第13回リードユース日本選手権多久大会 (LYC2025) 開催報告 …… | 2 |
| 国際山岳連盟安全委員会 内部委員会および総会・講演会への参加 … | 4 |
| 奥多摩五十人平野営場がオープンしました …… | 6 |
| 一般社団法人 群馬県山岳・スポーツクライミング連盟 自然保護委員会のSDG sな活動 … | 8 |
| Enjoy Climbing …… | 8 |
| 第21回 山岳遭難事故調査報告書 その4 …… | 9 |
| JMSCA、寄贈図書、表紙のことば …… | 12 |

第13回リードユース日本選手権多久大会 (LYC2025)
開催報告



2025年5月17日(土)および18日(日)の2日間にわたり、佐賀県多久市の「九州クライミングベース SAGA」にて、第13回リードユース日本選手権多久大会 (LYC2025) を開催した。

本大会は、全国のユース各世代の日本一を決する大会として、公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会 (JMCSA) が主催し、佐賀県との共催、佐賀県山岳・スポーツクライミング連盟による主管のもとで実施された。

国内最大級の屋外壁を有する本施設は、過去にジャパンカップの開催実績もあるハイレベルな競技環境である。選手にとっては、技術のみならず戦略性や持久力も求められる舞台であり、全国各地から集まった182名の若きクライマーたちが、日頃の鍛錬の成果をぶつけ合った。

■開催概要

第13回リードユース日本選手権多久大会 (LYC2025)

期 日 2025年5月17日(土)～18日(日)

参加選手数 182名
(U-19男子39名、U-19女子35名、
U-17男子57名、U-17女子51名)

会 場 九州クライミングベース SAGA

来場者数 予選約570名、決勝約330名

ユース日本選手権は昨シーズンまで、ジュニア、ユースA、ユースBの3カテゴリーにより競われていたが、国際スポーツクライミング連盟 (IFSC) によるカテゴリー編成の変更を受け、今シーズンからU-19およびU-17の2カテゴリーでの開催となった。



■競技

競技は例年通り予選2ルート、決勝1ルートの形式とし、男女別にU-19 / U-17で共通のルートにより実施した。男子決勝はそれぞれのカテゴリーで唯一完登した船木 (U-19)、濱田 (U-17) が優勝。女子決勝は小田 (U-19)、林 (U-17) が激戦を制し優勝する結果となった。各カテゴリーとも、選手たちの身体能力とルート読解力が高く、今後の国際舞台での活躍を十分に予感させる内容であった。また同時に各カテゴリーとも誰が優勝してもおかしくない状況で、ユース世代の選手層の厚さが垣間見えた。

■大会運営

大会は、佐賀県山岳・スポーツクライミング連盟の主管により開催。同県では各ジャパンカップや、SAGA2024国スポなどの開催経験があり、今回もスムーズかつ安定した大会運営を実現した。改めてボランティアの皆様にお礼申し上げたい。

また本大会では、より多くの観客・視聴者にとって見やすく快適な大会となるよう、映像配信面での強化にもチャレンジした。特に予選でのYouTubeライブ配信のクオリティ向上を図り、遠方からも多くのファンが競技の様様をリアルタイムで視聴した。

さいごに、本大会の開催にあたり尽力をいただいた、全ての関係者の皆様にお礼申し上げます。

(実行委員長 百瀬恭平)

【競技結果】

| | | | | |
|------|----|----|-------|--------------------|
| U-19 | 男子 | 1位 | 船木 陽 | 栃木県山岳・スポーツクライミング連盟 |
| | | 2位 | 長森 晴 | N 高等学校 |
| | | 3位 | 西尾 洸音 | 兵庫県山岳連盟 |
| U-19 | 女子 | 1位 | 小田 菜摘 | 大阪府山岳連盟 |
| | | 2位 | 麦島 心花 | 中部大学春日丘高等学校 |
| | | 3位 | 柿崎 咲羽 | 東京都山岳連盟 |
| U-17 | 男子 | 1位 | 濱田 琉誠 | 神奈川県山岳連盟 |
| | | 2位 | 仲田 和樹 | 神奈川県山岳連盟 |
| | | 3位 | 齋木 猛斗 | 三重県山岳・スポーツクライミング連盟 |
| U-17 | 女子 | 1位 | 林 有沙 | 石川県山岳・スポーツクライミング協会 |
| | | 2位 | 堀内 優里 | 静岡県山岳・スポーツクライミング連盟 |
| | | 3位 | 村杉 汐里 | 千葉県山岳・スポーツクライミング協会 |



写真 Ryo Kubota/JMSCA/アフロ

国際山岳連盟安全委員会 内部委員会および総会・講演会への参加

北村憲彦

UIAA (UNION INTERNATIONALE DES ASSOCIATIONS D'ALPINISME, International Climbing and Mountaineering Federation, <https://www.theuiaa.org/safety/>) の安全委員会では、ここに登録している登山道具メーカー70社に2000以上の製品に安全ラベルを発行している。委員会はそれらの安全性を保障するために評価方法の整備や評価基準の見直しを続けている。設立されてから50周年にあたる今年は、シャモニのENSAで2025年4月14日～17日に開催された。正会員13名(スイス、フランス、ブラジル、米国、ドイツ、スウェーデン、イタリア、ポルトガル、英国、オーストリア、日本、トルコ、ベルギーから各国代表組織から1名)、準会員11名(米国、オーストラリア、国際、スイス、北マケドニア、アルゼンチン、台湾から各代表組織から1名、米国から個人3名)、および認証を審査される登山道具メーカーから約20名の参加があった。

朝9時から内部委員会または個別案件に関する小委員会(WG)が12時ごろまで、午後は14:00～17:30まで総会が基本スケジュールで、1日目の総会では本委員会の歴史が概説され、背景となったArnold Wexlerの確保理論(AAC, 1950)、1961年のダイナミックロープに関する規格(第1号)など時代のニーズへの責任ある対応に感心した。2日目(4月15日)は18時30分から20:00～21:30まで安全委員会50周年記念講演会1「登山と用具、共同の軌跡」はシャルレ、ベアール、ピボット、モーリスの対談形式、3日目(4月16日)も同じ時間に記念講演2「登山用具の規格、歴史と進展」はピボット、シャルレ、ボナッティ、ジャノッティの対談と会場からの質

疑交えて進められた。この二つの記念講演は委員会以外にも開放され、一般参加者も30名も加えて、約80名の聴衆があった。懐かしい写真や出来事も挿話され、アルプスを中心とした用具の進歩や安全保障のための規格づくりの必要からUIAAの安全委員会が設立されてから今日までを概観できた。

安全委員会の総会前に、事前承認された新メンバー(今回はJMCSA)が紹介され、2025年予算が正承認され、続いて小委員会の進捗状況も報告された。またACT labs(米国)も試験機関として承認された。大型試験装置もあるLaboratoires Pourquery(フランス)はヘルメットだけの認証テストを申請しているが、すでにEU圏で11カ所もあり必要性が議論された。

ボルトWGでは、懸垂下降用支点リングやアンカーの溶接不良によるリコール問題、関連のドイツでの溶接ロボットによる品質安定性の向上、めっきされたアンカーの腐食やその試験の困難さ、関連してすでに概要は出版されているが、3日目に各地域でのボルト腐食問題も議論された。繊維・織物WGではアイスクライミング競技用のスーツとしてフェンシング競技スーツ素材の効果や紫外線耐候性が取り上げられた。シャープエッジロープ切断WGでは、登攀事故例にもとづいて岩角などシャープエッジに対するロープの強度テストの方法についてもイタリアから具体的に提案され、今後も議論されることになった。スタティックロープWGでは、スタティックロープ、セミスタティックロープ、ハイパーロープなどの用語の混乱についても議論された。クライミングジムに関する安全性WGについても意見が交わ



UIAA 安全委員会 50周年総会参加者全員で記念撮影 (2025. 4.17)



2025. 4.15 会議 2日目 UIAA 安全委員会設立 50周年記念講演会 (対談)
 向かって左から、Jean-Franck Charlet (ENSA 教授, UIAA 安全委員長,
 同委員会名誉会員), Alain Maurice (Petzl 社デザイン本部長),
 Denis Pivot (CAMP 社, 欧州標準化委員会の委員長),
 Michel Beal (Beal 社 最高経営責任者)



2025. 4.15 会議 2日目 UIAA 安全委員会
 設立 50周年記念講演会ポスター

された。このように各WGでは状況や条件の変化に適応した試験方法の見直しも検討されている。

このほかにも、確保器具のブレーキ抵抗、ヘルメットの側方強度、キャニオニングやケービング用のスタティックロープ、今回に安全規格の改訂について審議され投票され、規格後の適用日も議論・承認された。今後の新たに必要となりそうなWGにスキー用ヘルメット、兼用靴とスキーやアイゼンとのバイディング器具、自動確保器具、アイススクリュウ、キャニオニング用ハーネス、確保器具などが挙げられた。高い認証費を理由に25の安全ラベル辞退も報告された。

3日総会の最後に自然との共生問題などについてフィンランドとスイスから話題提供された。岩場の窪みに棲む野鳥の保護の現状について、クライマーへSNSで情報配信などが提案された。

4日目最終日(4月17日)は前日から30センチの積雪もあり、朝からシャモニ全体で大規模な停電となり、エクスカションプログラムはすべてが中止になった。代わりにENSAの警察の山岳救助隊がロープによる引き上げ救助や張り込み救助について、昔のやり方と現代とを比較した訓練の様子を見学できた。当時の衣装も

再現して訓練するという徹底ぶりであった。昔の工夫の数々、現代のモーター駆動による迅速な方法の優位性が印象に残った。ENSAの図書館も見学し、100年前の収蔵書アルパインジャーナルも閲覧できた。

その後の本委員会の動向としては、中国の試験機関からのUIAA認証申請に対して5月8日にオンラインで聞き取りは済ませた。安全委員会としては6月3日にオンライン、10月にハイブリッドで内部委員会と総会の予定が承認された。

この委員会では、安全に登山を楽しむために用具の強度保障の面から、議論を尽くし、実行するための現実的なすり合わせを参加者の間でオープンに進められていることが印象的だった。多くの日本人が輸入品を使用しているので、UIAAラベル製品の安全について規格に参加する意味は大きい。UIAAが世界のすべてではないが、他の国の仲間との意見を直接に交わせる場は他にない。また参加者が立場の違いはあれど、同じように使う用具でクライマーを守る使命感を持っていることは頼もしい。最後に今回の参加にあたってはJMCSAからENSAでの宿泊費を補助いただいたことについて、本紙面をお借りして感謝申し上げます。



2025. 4.17 ENSAの体育館(クライミング場)救助技術(道具)の昔と今の違い検証。青いアウターが今の救助隊、黒いニッカボッカと大きな黒いベレー帽が昔の救助隊



2025. 4.18 前日まで降雨と降雪から抜けるような快晴の朝、シャモニーからモンブランを仰ぐ

奥多摩五十人平野営場がオープンしました

老朽化等の理由で2019年3月末に閉鎖された奥多摩小屋の跡地に、本年4月29日、「五十人平野営場」がオープンしました。

奥多摩石尾根に位置した旧奥多摩小屋は、雲取山登山における「緊急避難場所」として山岳遭難を回避する施設であり、非常に汚かったとはいえトイレ施設を利用することで自然環境への負荷を可能な限り軽減させるという、山の安全と山岳環境の保全を担う重要な拠点でした。また、旧テント場は雲取周辺の登山ルート上で最も広く、富士山を望める抜群のロケーションが人気でした。

私たちは小屋の閉鎖が公表される以前から、少なくともテントサイトの復活とエコトイレおよび緊急避難施設の建設を求める署名活動を行って1360名程の署名を集め、東京都山岳連盟に立ち上げた「特別委員会」として奥多摩町はもとより環境省や東京都、地元出馬の都議や議員への陳情など、地道に働きかけを続けてきました。また、自然保護委員会でも定期的に周辺のパトロールを行い違法テントやごみの投棄をチェック、また水場の保全活動も実施してきました。

こうしたことが奏功してか、都議会での野営場新設の決議、関係各省庁との調整を経て、2024年度中の開業を目指し、2023年10月末より翌9月末を工期とする建設工事が始まりました。しかし、資材調達が遅れ、開業が本年4月にずれ込んだ次第です。

4月29日には地元奥多摩町で、開業に尽力頂いた議員や都議、山岳関係者が集い、オープニングセレモ

ニーが開催されました。

野営場施設に関しては、完全予約システム、トイレの処理方法や汚水タンクの容量など、危惧される問題も多く、今後も注視していきたいと考えています。

4月22日から始まった野営場の予約は、当面試行期間として70張定員のうち30張で留めていることもあり、休日はすぐに満杯となる盛況です。管理を委託されている雲取山荘新井オーナーのお話ですと、特に開業直後のGW期間中は、やはり事前予約しない闇テントがあり、またトイレのルールが守れない利用者も目に付いたとのことで、今後、利用ルールをどう徹底していくかも課題となっています。

とはいえ、奥多摩を愛する山屋の悲願であった五十人平野営場、是非活用してみてください。

野営場の予約等については以下を参照して下さい。

<https://www.yamatan.net/hut/gojunindairayaeijo>

(公社) 東京都山岳連盟自然保護委員会 小高令子



閉鎖期間中の水場のチェック



閉鎖中の旧奥多摩小屋



オープンを待つ五十人平野営場の管理棟とトイレ(2025.3.1撮影)

第61回全日本登山大会 兵庫大会のご案内

毎日登山と近代登山の発祥地・六甲山

期日：令和7年10月25日（土）～27日（月）

会場：神戸市：瀬戸内海国立公園六甲山地（再度山・摩耶山・六甲山）



神戸ハーバーランドから見る六甲山地

主 催 公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会
 主 管 兵庫県山岳連盟
 後 援 (予定)環境省・スポーツ庁・兵庫県・神戸市
 公益財団法人兵庫県スポーツ協会
 公益財団法人神戸市スポーツ協会
 一般財団法人神戸観光局

協 力  神戸登山プロジェクト TREK KOBE

摩耶山再生の会（マヤカツ） 神戸愛山協会 神戸市民山の会

一般社団法人 群馬県山岳・スポーツクライミング連盟 自然保護委員会のSDGsな活動

群馬県の自然保護委員会では、毎年5月の最終日曜日に「自然観察会」を開催。主な参加者は県内在住者ですが、県外からも数名の参加があります。ルート構成は、山慣れしていない方ではなかなか単独での入山がためられるような踏み跡程度の不明瞭箇所や、急傾斜などを含みますが、委員会所属員が2年がかりで複数回の下見を重ねて参加者の安全に配慮しています。

令和5年度の自然観察会では、昭和60年に起きた日本航空123便の墜落事故現場である御巢鷹の尾根から、県境に位置する大蛇倉山までのルートを歩きました。アズマシャクナゲやハクサンシャクナゲが咲き誇る中を進み、昇魂之碑では献花と黙とうをささげ、委員による当時の状況説明に耳を傾けながら、惨禍を改めて胸に刻みました。

令和6年度は、上毛三山の一つである榛名山を舞台に、江戸から明治時代にかけての歴史的遺構の観察を行いました。ヤマツツジが彩る沼の原を抜け、スルス峠を越えると農業用の水利を目的に、榛名湖の水を引くために掘られた手掘りのトンネル、「右京の無駄掘」を見学。その後は現在でも砂防の役割を担っている「デ・レイケ堰堤」群を観察し、当時の水利事業の苦労に思いを馳せました。締めくくりは、スルス岩からの360度の大パノラマを楽しみ、自然と歴史に触れる一日となりました。

また、自然観察会は清掃活動も兼ねており、各参加者へポリ袋を配布してルート上のごみを拾っていただいています。不法投棄物に加えてかつて山深いその場所で行われていたことがうかがえる物品



も散見され、興味深いものとなっています。

もう一つの恒例行事として毎年2月には雪山研修。ほかに不定期に委員会内研修を行っています。令和6年度は、榛名山の造山活動の学習、沢登りを2回、きのご観察、岩場の通過技術とロープワークなど、実践的かつ多様な内容を行いました。楽しみながら知識と技能を高めるこの取り組みは、委員のスキルアップに大きく貢献しています。

今後の課題として、参加者が減少傾向にある自然観察会の活性化と、委員の高齢化への対応が挙げられます。自然の魅力をより多くの人に伝え、新たな参加者・委員を増やすための工夫と努力が求められます。自然との触れ合いと学びの場を通じて、持続可能な活動を目指していきたいと考えています。

このほか、赤城山・榛名山・尾瀬・谷川岳を中心に、環境美化運動や清掃登山なども継続的に実施。また、「山の日イベントin谷川岳」や「上州武尊山スカイビュートレイル大会」、「ぐんま山フェスタ」などの県岳連・地域のイベントにも積極的に協力し、登山文化の普及と自然環境の保全に努めています。

(一般社団法人 群馬県山岳スポーツクライミング連盟

自然保護委員長 細野義法)

Enjoy Climbing!

Enjoy Alpine Climbing! 連載③

— アルパインクライマーとしての成長 —

鈴木 雄大

コロナ後の2022年から2024年、この3年間に行ったエクスペディションの数々が、新しいクライミングの発想と、自分にとって美しいラインを見出す力を養ってくれた。2024年のペルー Quitaraju とパキスタン Thui II での2つの初登攀も、これまで少しずつ積み重ねてきた経験がなければ登れなかっただろう。

麓の村に辿り着けるかも分からない、行ってみないとラインがないかもしれない、次のピッチが繋がっているか分

からない不安の連続、といった未知を次々と克服し、ワイルドな山頂に繋げていくような冒険的なアルパインクライミングを追求していきたい。

2024年、この年は秋にパキスタン Thui II へ行くことが決まっていたが、僕はさらにもう一つ、比較的安く行けるペルーアンデスへの遠征を熱望していた。そこに丁度よく、オークラと大坪もペルー遠征をぼんやりと計画しているようだった。僕も金銭的な余裕はそんなになかったが、29歳という20代最後の歳に、勢いも借りてペルーも行ってしまおうと決断した。また、30歳を超えると海外遠征に行けるようなパートナーは減っていくと日本のクライミングシーンを見ていると想像がしたが、この機会に新たなパートナーであるオークラと大坪と、ヒマラヤより安価に、それでいてチャレンジングな対象があるペルーアンデスに行けるのは今後のクライミングキャリアにおいて意義のあること

だと感じていた。

さて、どのようにこのキタラフの未踏ルートを探したか、僕は2023年にビルカノタ山群のオウサンガテ北壁に登ったが、より一般的なブランカ山群に行ったことがなく、興味を持っていた。その中に未踏のラインを見出し、初登をするのが今回の狙いであった。ブランカ山群では、大体の山に既登ルートがあり、AAJやオンライン検索でラインを見つけることができた。そんな中、オークラ邸にて三人でリサーチを進めていくと、キタラフの南壁と南spurは誰もトライしたことがなさそうだったということが分かり、これはブランカ山群における非常に冒険的な課題の一つになり得るのではないかと感じた。写真からも、上部にあまり巨大なセラックが垂れ下がっていないように見えた(?)のも魅力的であった。かといって、よくペルーにある雪壁や氷壁の登攀に終始するような単調な内容でなく、ロックと氷雪のミックス壁の下部、スノーマッシュルームの連続する冒険的な南spur、最後に5750mを超える標高での複雑そうな南東稜という、様々なアルパインクライミングスキルを使って登っていく内容が冒険的で面白そうだった。最後の南東稜の高低差250mほどは、40年程度前に登られたのではないかという情報はあったが、時代からしておそらくFIXロープでの登攀だったのではないかと予想したのと、全体の工程から、そのパートがとても短いこと、また、温暖化などにより稜線の状態も変わっているだろうとの予想から、私たちのこの冒険をやめるには足りない事前情報であった。

私たちは、対面にアルパマヨのルートがよく見えるキタラフ北壁から高所順応を行った。一番よく登られているルートとはいえ、60~70度程度の氷に熱い太陽が照り付け、そこそこ大変な順応だった。山頂は更に標高差40mほど、また、水平距離で数百mほど歩かないといけなかったので、山頂の少し手前で降り始めた。そして一度ワラスの街へ帰り、作戦を立ててキタラフの南面に戻ってきた。最小限の荷物を持って、馬2頭と一緒に歩き、ベースキャンプをLaguna Jatuncochaに設置した。標高は3880m程度だ。ここから先、南壁の麓までは険しい急勾配な草やガレ場となり、馬は上がってこれない。そこは我々だけで、Laguna Quitacochaのさらに先まで、4800m地点にABCを設置した。この南面はアルパマヨへの登山道とは非常に異なり、暫くの間、人が立ち入った痕跡が見当たらなかった。頭より高く生い茂る藪を掻き分けて重荷を上げるのは中々大変だった。

6月25日、暗闇の中、月とヘッドランプの灯りを頼りに



ミックスクライミングで急峻なリッジをフォローする大坪

30分ほどクローワールを詰めていくと、やがて傾斜は強くなっていき、ロープを出した。まずはKazumasa Otsuboが先頭でルートを拓いていく。乾いた岩だが、脆く、クラックも乏しいため、ジリジリと進むセクションで、待っている身としては不安が増すところ。しばらくしてビレイ解除の声が聞こえた。5日分の食糧を背負ってフォローすると嫌らしさが身に染みた。Otsuboは暗闇の中うまく軌道に乗せてくれ、僕たちの長い山旅が始まった。そこから簡単な登りをもう1ピッチ伸ばしていくと、雪が出てきて傾斜が増し、やがてミックス壁となった。ここで僕にリードを代わる。ルート下部にあたる南壁セクションは、ロープ1本に3人が数珠繋ぎとなり、2ピッチ交代でリズム良く登っていくシステムとした。大部分の岩が脆く、氷もなければクラックも少ないので、60mきっかりにアンカーを作ろうとすると、時間が幾らあっても足りず、ビレイを解除して適宜3人同時に登らないといけないからだ。結果、これが上手く行き、スピードアップにつながった。

60~70°程の雪壁とミックス壁をテンポよく登っていくと、垂直の凹角が現れた。遠目には簡単そうに見えていたが、ここ数日の雪にホールドが隠されているのと、クラックの形状がカムを受け付けず、短いがかなりシビアなワイド登りとなった。M6程度だろうか。効いてなさそうなカムを3本ほど刺し、いくらアックスを引っ掛けても手応えのないシュガースノーでマントルをジワジワと返す。その後も暫くアンカーが取れないので、適当なところでペッカーとピトンを打ち込み、何とかビレイ点とする。やはりビレイ点の掘り出しや作成に時間がかかるので、同時登攀で1ピッチの距離をなるべく稼ぎたいところだ。

第21回
山岳遭難事故調査報告書 その4

JMSCA UIAA資格委員会
UIAA ARWG/ Mountaineering Com.
IMSARJ 青山千彰

6章 山岳遭難事故データベース分析結果 新規登録282人の特徴

2024年6月現在、事故データは新しく、282人分が登録された結果、4951人となった。

JMSCA 121人、労山161人

総データ数4952人

EXCEL使用セル数 (3,402,024 data)

687fields×4952records



図13 新規登録データの主なクラスター発生域

4. 女性事故者急増に関する事例分析

女性事故者の急増に関して、どのような事故であったのか、その概略を掴むため、自由記述の2問「問4.1：どこで？何をしていた時」「問4.2：事故の内容と問題点の指摘」の分析を行った。

問4.1からは図14、表10、問4.2からは図15、表11が得られた。それぞれの図表には、3世代（70代以上、60代、50代以下）で表示し、図は自由記述回答文から複数のKeywordを取り出し、該当数を調べたもの、表は代表的な回答文の一部を該当数の多い項目から代表例を示したものである。

補足のため、女性事故者178人の基礎能力とリスク対応について表12～15、事故態様と天候、事故発生場所の登り・下りを表16～18に、外傷を表19、ヒューマンエラーを表20に示した。

3世代女性の事故分析の結果、最も特徴的な傾向を示すのは、女性の事故者年齢分布曲線（図12）のピーク値を示す70代以上であった。

図15の事故記述内容からは15の関連項目が取り出された。項目ごとに3世代比較すると、70代以上において、「ヒューマンエラー」特に「視認能力」と「バランス」に関する問題が増える事を示している。

視認に関する回答（表11）では「集中力の途切れ」「よそみ」「足下をよく見ない」などが見られる。また、表10の事故のきっかけとなる「注意を奪われる」でも、「声かけ」「スマホ受け取り」「足もとより花」「前方の橋」など、歩行とは異なる事に関心が向いてしまう瞬間があったと回答している。

これら視認、注意力の低下には、70代以上で表13の聴力、表14の視力ともに能力が低下していることも関係していると推定している。

一方、表15のリスク対応として「逃げ道の検討」でも、かなりの人が登山への慣れのためか、リスクに関心を払わなくなっていることが分かる。

次に、筋力は70代以上で最大可搬重量（表12）が5～10kgまで落ちてくるが、10kg以上かつぐ人も多い。登山を続けているためか、「筋力」に関する問題報告は少ない。しかし、「バランス力」は不安定になる指摘が多い。代表的な回答には「バランスを崩して転ぶ」「強風にあおられ」「膝の踏ん張りがきかない」がある。

バランス問題は、筋力もさることながら、感覚機能や足首、膝の関節の柔軟性にも関係する。事故が下山時（図

14、表18)に多発するのは、多くの専門家が指摘するように、高齢者が抱えるバランス問題や踏ん張りが効かない問題が関係しているのであろう。

このような状態で、「枯葉、木、木の根、苔、+（ぬれ、積雪）」などのハザード要因が重なると、「滑り」「つまづき」が発生する。また、ストックも本来バランスの崩れを防ぐものであるが、滑りの一因となっているケースも報告されている。

女性3世代で比較すると、谷村の心理分析法を用いたヒューマンエラー分析（表20）からは、「気づかなかった」

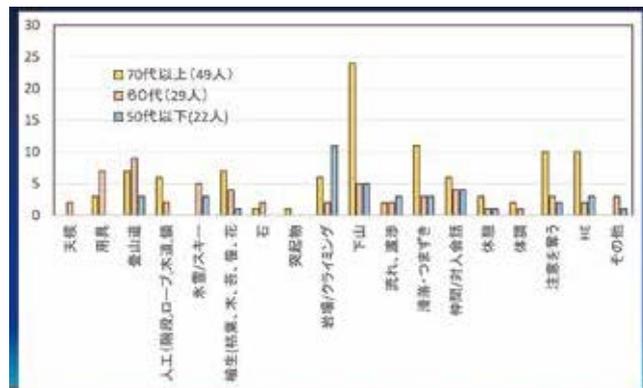


図14 女性3世代に関する「どこで、何をしていた時」事故が発生した

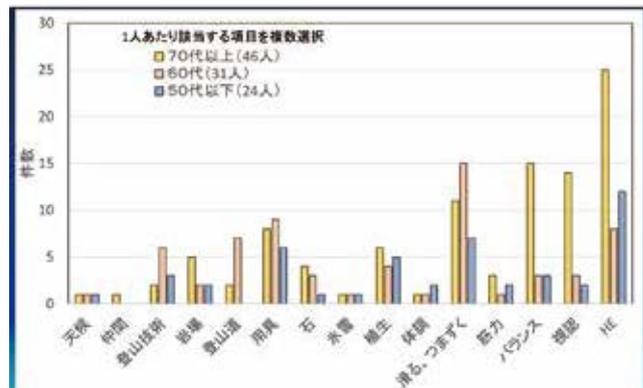
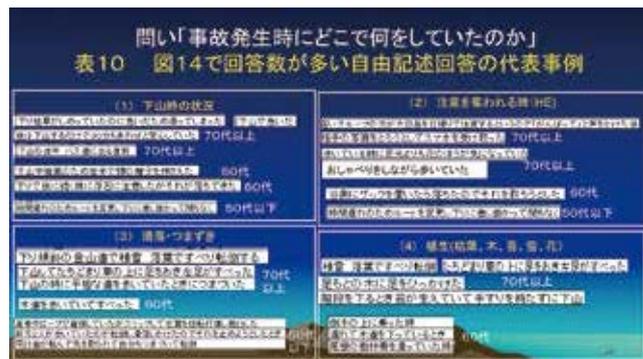


図15 女性3世代に関する「事故内容と問題点指摘」



「大丈夫だと思った」に関しては60代から始まり、70代以上に多くなる。また、バランス力低下も同様の傾向を示す。一方、若い世代では、僅かな差であるが「慌てる」「疲れる」が50代以下の特徴となっている。

事故後の外傷(表19)は転倒、滑落が多いため、「骨折」が多くなっている。先述の「ちょっとよそ見」した人々も転倒し重傷となる程の骨折を負っていた。後述する杉坂の指摘にもあるように、高齢女性の特徴的な事故パターンとなっている。

なお、図12の年齢分布での比較では、女性事故数が上回る世代が年々50代以下にまで拡大している。登山能力がイージーな登山形態を選ぶことで、ヒューマンエラー

を起こしやすくなり、70代以上に類似してきたのかもしれない。

それでも、50代以下では他の2世代と異なり、登山本来の問題として「取り付け支点」「ビレイ」「カム」などクライミング系の事故問題が主に報告されている。

最後に、杉坂ガイドから見た女性登山問題について5にまとめた。ガイドとしての経験からも70代以上からの認知能力の衰えを指摘している。ヒューマンエラーの増加を主因とする当分析結果と類似していることが興味深い。

5. 女性登山者を対象にする杉坂ガイドから見た女性登山の問題点

- 一般的に女性は男性より筋肉量なども少なく、力ないと思われそれが加齢により加速、登山者の高齢化により昔より事故を起こすことが多くなった。登山技術不足、瞬間的な足さばきや反応が遅いと思うことはままあります。特に70歳が境だな、と思うことがあります。すれ違いのときに、相手との距離感がはかれていない、自分がどのくらいよければ邪魔にならないかななどがわからない。具体的にここで、と指示しないと動けない方が散見されます。
- 女性は旅行の延長としての登山をとらえている部分があるのでは?と思うことがあります。それが安易な登山につながっている部分はないかな、と思ったりしています。
- 昔より甘い登山へのイメージ。実力の見誤り。だいたい自分はコースタイムの1.2倍だから..とおっしゃる方はほぼ1.5倍から1.8倍かかります。シンプルに考えると女性は加齢とともに特に骨が弱くなっていて、転倒=即骨折の図式はあるのでそのあたりは男性だったら、捻挫ですむことが済まない、重症になりがち、というのはあるかと思えます。



令和7年度 第2回 理事会報告

- 日時: 令和7年5月8日(木)
13:00-17:10
- 場所: JSOSビル3F会議室5及びZoom
- 出席者: 蛭田会長、古賀・吉田各副会長、小野寺専務理事、赤尾事務局長、野村・町田常務理事、小高・小田部・栗田・佐藤・島田(13:30~離席)・中橋・西谷(13:40-15:00離席)・畑中・樋口・望月・安井各理事以上18名 佐久間・古屋監事 以上2名
- 欠席: 杉本・中島・濱田・平田・安井各理事 以上5名

1. 開会
2. 蛭田会長からの挨拶
本日も種々の議案がございますが、よろしくお願ひします。
3. 会議成立状況報告
理事数 開始時23名中18名出席(定款第33条、定足数=12名(1/2超))

- 監事数 2名出席
- 4. 議長選出
蛭田会長が議長を務める。(定款第32条)
- 5. 議事録署名人
会長及び監事(定款第34条)
- 6. 議題(注. 審議順に記載)
- 議案第1号 議事録の承認について

令和7年度第1回理事会議事録について
理事会終了後に配布されており、異議なく承認されている。

- 議案第2号 役員選考について
田中役員選考委員会委員長から、選考の概要と経緯、選考結果、提案事項の説明がされた。その後以下の補足説明があった。
*候補者28名中、1名がガバナンスコード(年齢、勤続年数制限)要件を満たせず外れた。
*1名が年齢制限に抵触したが、今回に限り、選考された。
*役員候補者の漢字氏名、年齢、所属団体、理事経験年数の変更依頼が複数あった。
*総会では、役員候補1名ずつの承認可否を行うが、理事会としては包括承認でよいのではないかとということで、包括承認の採決

を取り、以下のように異議なく承認された。
反対0名、棄権0名、賛成18名

- 議案第3号 総会次第(案)について
小野寺専務理事が、配布資料を基に、総会次第(案)を説明し、以下の意見を反映して、変更し、送付することになった。
*パラクライミング協会との協力関係については、議案ではなく報告にした方が良い。
*基本財産の取り崩しについては、定款の表現にある“処分”としたほうが良い。
*役員を兼ねる正会員(岳連からの代表、岩手、兵庫など)は1名と計算する。
*新理事が、対面でなくてよいかという問題提起に対して、通常総会案内時に、新理事向けに、できるだけ対面でご出席してくださいと案内する。
*総会の開催通知については、宛先に”顧問”も追加したうえで、来週前半に送付する。
*財政再建については、報告議案から削除し、次回理事会で内容を審議、承認を経て送付する。
*総会資料自体は、6月5日には郵送できるように準備する。
*共済会改革のために岳連からの協力を仰ぐ件については、報告の部で言及するよう

にする。
*書面決議については、6月5日以降に、“議決権行使書”を郵送すると同時に、メールする。

*当“議決権行使書”は、氏名について自著としてPDFファイルの返信で可とする。

*“議決権行使書”は6月19日着までが有効とし、対象があったら、総会採決時には数え漏れないように要注意。

上記内容で進めることについて賛否をとり、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成17名

議案第4号 令和6年度総括及び決算報告案文書

小野寺専務理事が、配布資料を基に説明し、変更が必要ならば、6月5日(木)の次回理事会開催までに事務局にメールで連絡する。(山岳スキーはSKIMOに変更する。)

議案第7号 小野寺専務理事の退職金支給に関する取扱いについて

小野寺専務理事、古屋監事が、今総会の議案となる背景と、現状を口頭で説明した。現在、弁護士に提案内容を確認中。

今回、上記説明資料は、未完成なので、次回理事会で提案、決議できるように準備することになった。

議案第5号 SC競技規則一部改定について

中橋・畑中理事が配布資料を基に説明し、その後採決を取り、異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成17名

議案第6号 SC公認規程一部改定について

栗田理事が配布資料を基に、選手が公認大会参加時には、選手登録が必須であることを反映した変更内容を説明したが、その後以下の意見が出た。

*JMSCAが公認大会として認めたときのJMSCAの責任範囲をSC部で検討したほうがよい。

*今提案の素案を改めて見直すことになり、今回は取り下げ、次回理事会で再提案することになった。それまでは、従前の規程に基づき運用する。

議案第8号 基本財産の取り崩しについて

赤尾事務局長が説明資料を基に説明し、以下の意見が出た。

*処分の表現について
定款上、“基本財産の処分”と明記されているので、処分という表現にしたが、実質的には対応(使用、転用)なので、弁護士に確認し、適切な表現に変更し、次回理事会で最終決議することになり、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成17名

議案第9号 覚書について

(1)リードユース開催行政機関からの補助金について

事務局あて開催行政機関から、覚書が直接送付されてきた。小野寺専務理事が画面から紹介したが、交渉対応者の競技委員長の百瀬氏から特段の説明はなかった。補助金をJMSCAに提供いただける内容なので、大きい問題はないとみられるが、内容についてはSC部長及び競技委員長で協議し、その結果を後日報告することになった。

(2)都内行政機関でのクライミング壁オープンセレモニーについて

栗田SC副部長が経緯と現状を説明した。本来入札のプロセスを経る案件だが、時間がなく、JMSCAが中心になって受託するような内容の覚書にする予定。次回のガバナンス委員会で、覚書の内容を協議、承認されることを条件に採決をとり、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成17名

7. 報告

報告第1号 月次報告、キャッシュフロー

月次処理が終了しておらず、5月14日に行う財務委員会で最新状況を関係者に紹介予定。

報告第2号 財政再建計画について

吉田副会長、小田部理事が、以下のような内容を当計画に盛り込む予定と説明した。
一体制案の検討、事務局人員の負担軽減
—キャッシュフロー改善のための年度末資金対応策案(秋まで)
—SC競技、強化、スキーモ事業の支援スタッフとして外部リソースに委託し補助金対象とできないか、事務局リソースの負担軽減ができるようにしたい。

—SNSの更新(現場での)活性化を図る。

—その他

報告第3号 委員会常任委員について

小田部理事が、マーケティング、SKIMO委員会の状況と、常任委員の変更について説明した。
マーケティングについては、SNSの更新(現場での)活性化を図っている。SKIMO委員会については常任委員の変更があり、常務理事会で承認済であることを報告した。

小野寺専務が、遭対委員会での常任委員変更、野村登山部長が、指導委員会、自然保護委員会の構成委員の変更について説明した。

報告第4号 国スポ競技規則誤植訂正について

望月理事が当規則の誤植と、その変更であることを伝達した。

報告第5号 ボルダージャパンカップ招致について

町田SC部長が、誘致に熱心な行政機関から当該競技について、開催の打診をされており、SC部として検討していることを報告した。

報告第6号 山岳写真協会名義後援の依頼について

小野寺専務理事が、配布資料を基に、例年後援を行っている事業で、常任理事会で異議なく承認されたことを報告した。

報告第7号 割愛

報告第8号 役員派遣について(5月9日(金)～6月4日(水))

議長である会長から、各自読んでおくようにと伝達された。

8. その他

*町田SC部長が、3月度理事会で、競技会の支出実績の開示を求められた件について、BJC2024とBJC2025の支出実績紹介をしながら、さらなる詳細情報の提示が有効かどうかの問題提起をし、以下のような意見が出た。

—当情報の開示は有益である。

—担当者だけでなく複数の見方による改善検討の可能性もある。

—固定壁を作るのは、費用が掛かるので、根本のやり方から見直した方がよいのではないかと。

—今回提示されたものをベースにして、競技運営費用が適切かどうか検討メンバーを集め、精査してはどうか。

今後も、継続審議が必要ということになった。

*月報、封筒上の広告掲載について

T社と、M社が出ているが、どういう契約と経過で掲載されるようになったか、関係を見直した方がよいのではないかと、広告宣伝料を請求すべきかどうかなどの確認点があることを共有した。

*役員選考委員会による役員候補案は提示されたが、新理事候補者への財政状況の共有や、理事の役割を正しく伝える必要がある。現専務理事退任に伴う後任者の決定、引継ぎ案の策定と実施など、6月22日(日)定期総会後に、そのまま専務理事が退任した場合の問題を伝えた。

今後1-2週間で、現三役による三役会議を行い、対応の検討をすることが決定した。

以上

令和7年5月8日

記録 赤尾浩一

寄贈図書

| | | | | | |
|-------------------------------|--------------------------------|-----|------------------------|------------------------------|-----|
| 株KADOKAWA | 『自然に生きる』(辰野勇、角川新書) | 寄贈本 | 株山と溪谷社 山岳図書出版部 | 『大きな地図でみやすいガイド改訂版北アルプス北部・白山』 | 寄贈本 |
| 株日本運動員新聞社 | 『スポーツ産業新報』第2468号、第2469号、第2470号 | 新聞 | (一社)愛知県山岳・スポーツクライミング連盟 | 愛知岳連ニュース 第456号 | 新聞 |
| (公財)健康・体づくり事業財団「健康づくり」No. 565 | | 会報 | WSF ジャパン事務局 | WSF Japan News 第53号 | 会報 |
| 日本トレーニング指導者協会 | JATI 第106号 | 会報 | 株ネイチュアエンタープライズ | 『岳人』2025 June No.936 | 寄贈本 |
| 兵庫県山岳連盟 | 兵庫山岳 | 会報 | 株山と溪谷社 | 『山と溪谷』2025年65月号 | 情報誌 |
| 赤岳鉱泉山岳診療所 | 2024年度年報 | 会報 | 東京野歩路会 | 『山嶺』Vol.102 No.1143 | 会報 |
| 日本勤労者山岳連盟 | 登山時報 春号 (No.587) | 会報 | 日本山岳会 | 『山』5月号 (No.960) | 会報 |
| 山の会・玲峰グループ | 年会誌 | 会報 | おいらく山岳会 | 『山行手帖』No.786/24. 6 | 会報 |
| 株山と溪谷社 山岳図書出版部 | 『大きな地図でみやすいガイド改訂版北アルプス南部』 | 寄贈本 | 新潟県山岳協会 | 新山協ニュース 第378号 | 会報 |

かすみちゃんのハイキング日記



表紙のこぼ



「大和葛城山から金剛山方面を望む」
 ダイトレフォトコンテスト2024【最優秀賞】
 受賞作品

(撮影者：@yamakeisanさん)

【コメント】

大阪・奈良・和歌山の県境を縦走する長距離自然歩道「ダイヤモンドトレール」の沿線3府県と10市町村では様々な取組みを行っており、2023年から「ダイトレフォトコンテスト」を開催しています。

写真は2024年の「最優秀賞」を受賞した@yamakeisanさんの作品で、審査員からは「爽やかな大和葛城山頂の空気を感じさせるとともに、背後の金剛山へ続くダイトレにも思いを馳せられる」等のコメントがありました。

ダイヤモンドトレール活性化実行委員会事務局
 (大阪府山岳連盟もこのコンテストの意義に賛同し、協賛しています。)

編集後記

公益社団法人日本山岳会およびJST共創の場形成支援プログラム「ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点」の支援を受け、山岳写真データベースのサイトが作られました。https://www.mountain-photo.org/は、今と昔の写真を比較することで、山の変化を視覚的に捉え、自然環境の保全にも役立てられると考えています。比較可能な写真が多いほど有効性が高まりますので、過去の山岳写真をお持ちの方は、ぜひご協力をお願いいたします。

(松本光顕)

登山月報 第675号

定価 110円 (送料別)
 予約年間 3,000円 (送料共)
 (毎月1回15日発行)
 発行日 令和7年6月15日
 発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
 Japan Sport Olympic Square 905
 公益社団法人
 日本山岳・スポーツクライミング協会
 電話 03-5843-1631
 F A X 03-5843-1635

[山岳雑誌] 山と人、時代をつなぐ **岳人** 7月号

特別
 編集

夏山 2025

～憧れの高峰へ～

メンバーのウェブサイト、全国のメンバーストアや書店にて販売中!

価格1,200円(税込)



▶年間購読が断然おトクです!

年間購読 通常特典 購読割引 送料無料 限定品プレゼント

さらに モンベルクラブ会員さまには **5,000P** プレゼント!

モンベルクラブ会員さまで現在購読中の方は、次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典

岳人オリジナル手ぬぐい



岳人の表紙絵を描く
 中村みつを氏のイラストを使用!

限定
 デザイン

岳人
 カード

全国2,000ヵ所以上で
 ご優待!



全国の温泉や山小屋など提携施設で
 ささまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから! >>>

<https://www.gakujin.jp/>



全国の
 モンベルストア
 でも受付中!

お問い合わせ
 モンベルポスト



0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組みます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals)とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

| 持続可能な地球環境 | | 安心して暮らせる社会 | | 活力のある経済活動 | |
|----------------|---|------------------|---|-----------------|--|
| 関連する主なSDGs | 主な取組 | 関連する主なSDGs | 主な取組 | 関連する主なSDGs | 主な取組 |
| 12, 13, 14, 15 | <ul style="list-style-type: none"> 再生可能エネルギーの普及支援 自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング | 1, 2, 3, 4, 5, 6 | <ul style="list-style-type: none"> 健康づくりの支援 先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応 | 7, 8, 9, 10, 11 | <ul style="list-style-type: none"> 次世代モビリティ社会への対応 (自動運転車等) 災害に強いまちづくりの支援 |

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会*をめざします。

*外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会



日山協山岳共済会のご案内

**安全登山は登山者の努め、
山岳保険は義務。**

ご自身のために、ご家族のために。

日山協山岳共済会とは、

日山協山岳共済会とは公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)とアライアンスを組み、安全登山の指導・普及を図り、山や自然が好きな人たちのための互助と自立を目指す仲間の集まりです。山岳共済会は、日本の山岳遭難・捜索保険の草分けで、5万人の会員を持つ最大級の山岳共済です。年齢・既往症に関係なくどなたでも入会できます。

2023年 山岳遭難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課
(2024年6月13日)

| | |
|----------|-----------------------------|
| 発生件数 | 3,126 件 (前年対比 111件増) |
| 遭難者数 | 3,568 人 (前年対比 62人増) |
| 死者・行方不明者 | 335 人 (前年対比 8人増) |

